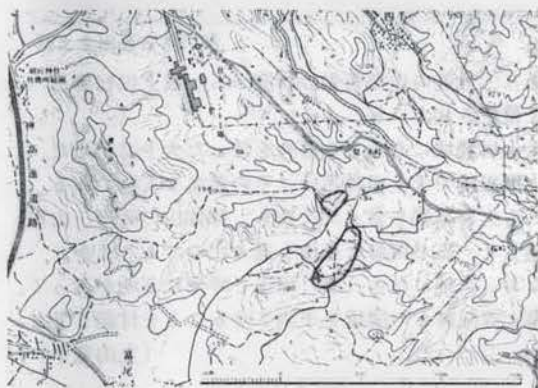


6. 多賀町梨の木遺跡の木炭塚

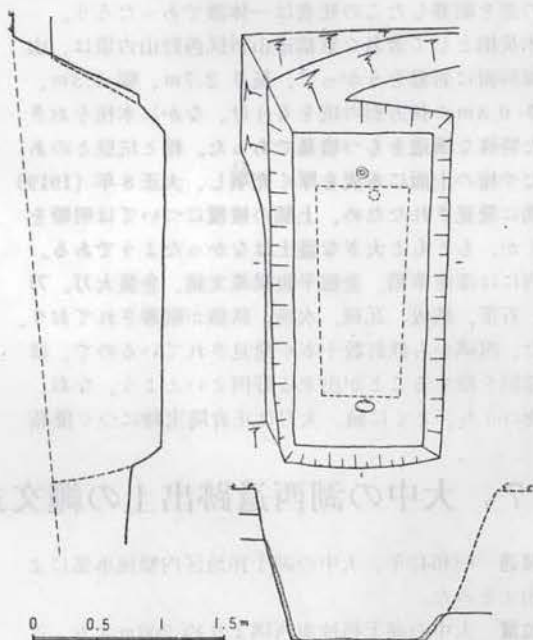


経過 昭和45年3月、多賀町富之尾の梨の木開拓地において、原哲三さんが自宅横を削土中、木炭とともに完形土器を発見された。このため、8日に現地調査に就いた私は、1基の木炭塚と、2点の壺が副葬されていたことを確認した。類例の少ない資料でもあり、ここに概要を報告して大方の参考としたい。

位置 近江・美濃・伊勢の国境をなす三国岳に源を発する犬上川の右岸、多賀大社の神体山である青竜山の東麓に、幽玄清響な梨の木峠がある。

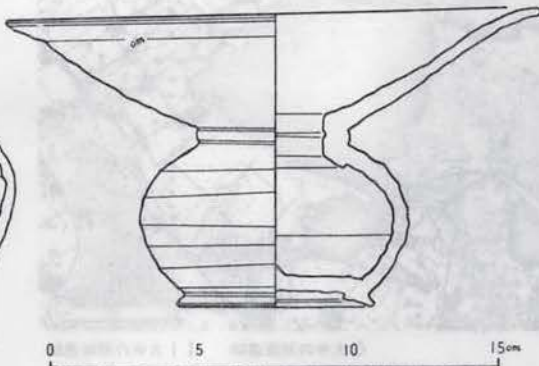
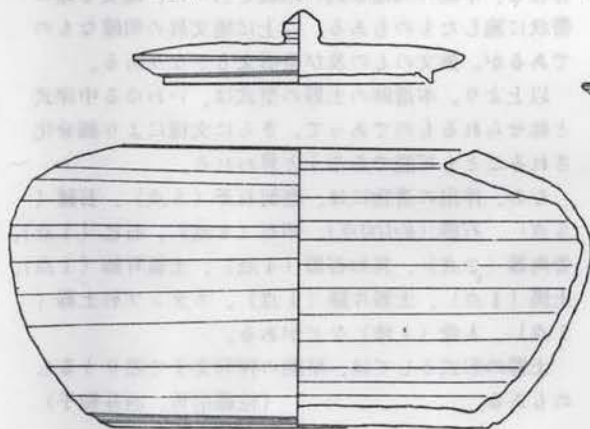
梨の木の古墓群は昭和39年に発見され、水野正好氏のもとに私と木村康子さんとで火葬墓を調査したことがあり、今回の地点は、その南西寄りにあたっている。

西は富之尾の集落から犬上川に開け、青竜山を隔てては敏満寺や胡宮神社がある。



梨の木古墓 木炭塚

遺構 私が現地に着した時は、すでに木炭の大部分は掘り出され、2点の土器や鉄釘片数点も取り上げた後であった。しかし、木炭の充満した塚の規模は長辺2.8m、短辺1.45m～1.2mを測り、北方に頭部を置いたことが推定された。また、痰壺は頭部の棺外に、有蓋壺は脚部の棺外に置かれたものであり、鉄釘は頭部寄りで見出されたという。

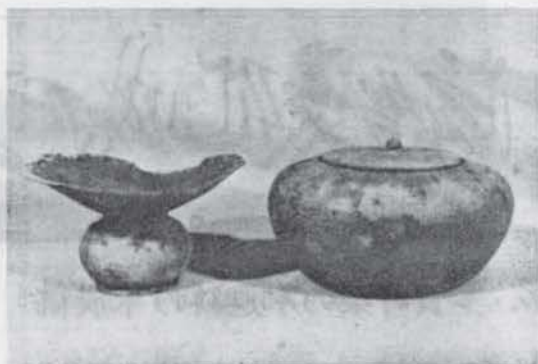


梨の木古墓出土土器

遺物 有蓋無頸壺は全面に緑釉の施された優品であり、蓋・身ともシャープなべら削りで器形を整え、釉はわずかに濃い緑色を呈する。蓋には突出したつまみをそなえ、内面にかえりをもっている。

痰壺は、口縁部が朝顔のように大きく開き、球形胴部に内傾した高台が付く。釉はわずかに濃緑色を呈し、上記の壺とセットで製作、窯入れがなされた感が強い。結びにかえて 平安時代の木炭塚に葬られ、美しい緑釉の壺を副葬したこの死者は一体誰であったろう。

木炭塚として著名な京都市山科区西野山古墳は、山の傾斜面に岩盤をうがって、長さ 2.7m、幅 1.3m、深さ 0.8mの長方形の坑をもうけ、なかに木棺をおさめた特殊な構造をもつ墳墓であった。棺と坑壁とのあいだや棺の上面に木炭を厚く充填し、大正 8 年 (1919) 偶然に発見されたため、上部の被覆については明瞭を欠くが、もともと大きな盛土はなかったようである。棺内には漆塗革箱、金銀平脱双鳳文鏡、金装大刀、刀子、石帯、鉄板、瓦硯、水滴、鉄鍬が副葬されており、また、四隅から鉄釘数十本が発見されているので、ほぼ棺制を察することが出来る好例といえよう。なお、遺物のうち、とくに鏡、大刀は正倉院宝物につく優品



梨の木古墓出土土器

であり、最近の山科条里の研究から、坂上田村麻呂の墓と推定されている。

大上川流域にも大きな勢力を誇った犬上君がいた。犬上御田兼や犬上白麻呂は、その著名な人物である。これら火葬墓群を営んだ氏族も、神体山の背後、山裾の美しく、また閑静な当地を選んだのであろうか。

なお、当地には古(小)屋寺と呼ばれる所があって、古墓と寺院跡との関連を予測させることを付記しておく。(丸山竜平)

7. 大中の湖西遺跡出土の縄文式土器

経過 昭和42年、大中の湖干拓地区内整地事業により出土をみた。

位置 大中の湖干拓地南西隅より約 200m北方、近江八幡市白王町地先、奥島山山塊の南東に派出する山地が大中の湖に没する位置にある。干拓前には、湖面より 0.5~1m下にあり、整地前は、表層に10~15cmの砂層、以下は黒色粘土層が50~60cm、最下部は灰色粘土となっている。遺物は、第2層の黒色粘土内に含まれていた。遺跡のうち、北半分は縄文早期~前期を中心とし、南部は後期を中心としている。なお、中期及び晩期については、ほとんどみうけられない。



○大中の湖西遺跡 || 大中の湖南遺跡

遺物 ここに紹介する遺物は、遺跡南部の後期を主体とした部分から出土したものであり、甕形を中心とし、若干の鉢形土器を含んでいるものと思われる。なお、1点であるが、釣手形土器と推定されるものがある。

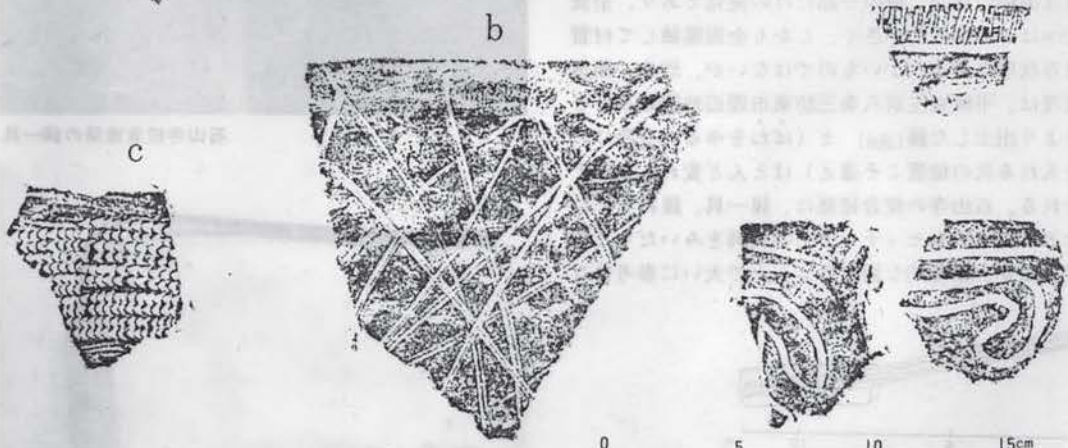
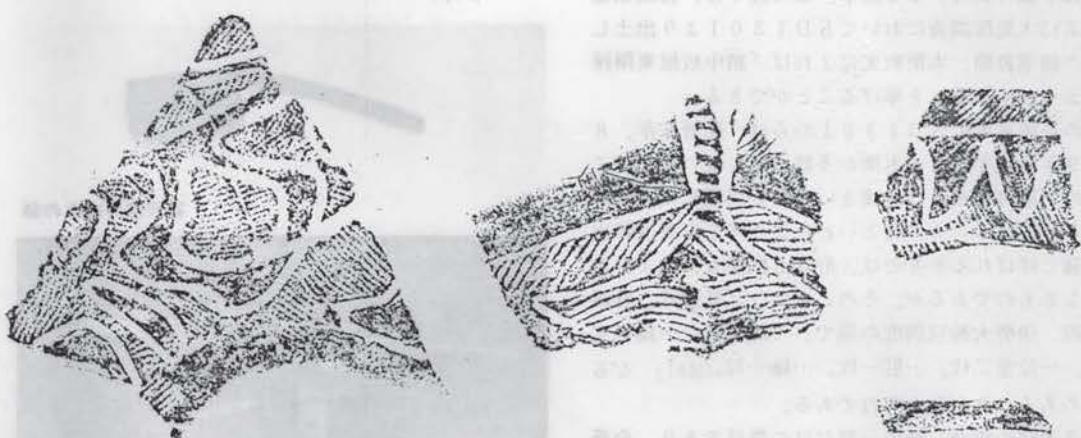
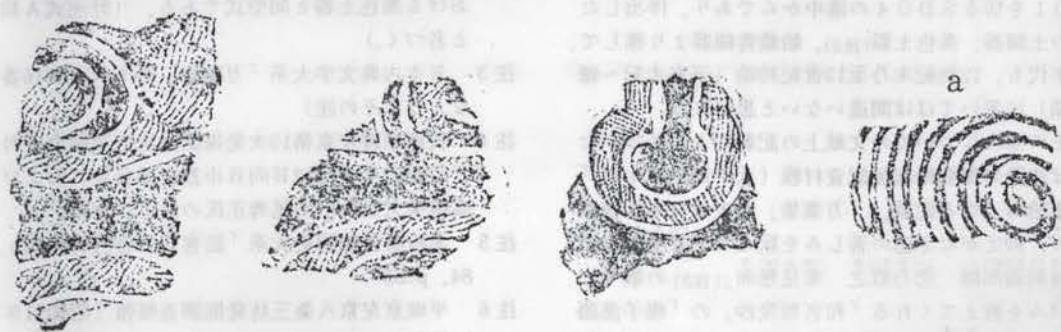
施文の手法は、いわゆる磨消縄文を主体とし、縄文の施文具にも2・3の種類がみうけられ、また、巻貝の背による擬似縄文もある。

近時、京都府平遺跡出土の土器の如く、棒状の施文具をもって線のみを施したものも若干ある。また、中部地方の勝坂式土器の影響を受けたものが若干存在し、中期の天理C式の系統を引いた、縄文を縦に帯状に施したものもある。以上は施文具の明確なものであるが、無文のもの及び条痕文もかなりある。

以上より、本遺跡の土器の型式は、いわゆる中津式と称せられるものであって、さらに文様により細分化されることも可能であろうと思われる。

なお、伴出の遺物には、磨製石斧(5点)、石錘(5点)、石鏃(約100点)、叩石(4点)、石匕(1点)、骨角器(2点)、異形石器(4点)、土製耳飾(1点)、土偶(1点)、土器片錘(1点)、スタンプ形土器(1点)、人骨(1体)などがある。

土器の形式としては、早期の押形文まで遡りうるものもある。(佐藤宗男、酒井和子)



0 5 10 15cm

a、羽島川式下層 b、京都府平遺跡類似 c、北白川下層II a式（これのみ出土地点が異なり、大中之湖中埋没島附近出土）

大中之湖西遺跡出土土器の拓本

8. 富波遺跡出土の鎖

昭和51年の秋から翌52年の2月にかけて行われた野洲郡野洲町富波遺跡の第2次発掘調査において、鎖(注1)が発見されているので紹介しておきたい。

鎖が発見されたのは、遺構区全体の北東隅に位置する「帆立貝式古墳」(検出遺構、長さ約20m)の周壕SD01を切るSD04の溝中からであり、伴出した多数の土師器、黒色土器(注2)、舶載青磁器より推して、鎖の年代も、12世紀末乃至13世紀初頭(平安末紀~鎌倉初期)に置いてほぼ間違いないと思われる。

鎖そのものについての文献上の記載例としては、たとえば法隆寺伽藍縁起流記資材帳(天平19年)中の「鎌子参拾口」なる記載、「万葉集」巻十六にある穂積親王の、抑えがたき恋の苦しみを歌った「家^あ有^あ之^あ櫃^あ余^あ 鎌^あ刺^あ蔵^あ而^あ師^あ 恋^あ乃^あ奴^あ之^あ 東^あ見^あ懸^あ而^あ」(注3)の歌や、鎖の訓みを教えてくれる「和名類聚抄」の「楊子漢語抄云鎌子蔵乃賀岐」なる記事、また近くは、長岡京址左京第13次発掘調査においてSD1301より出土した鎖の請求書簡、木簡釈文によれば「請中板屋東隔鎖一具云々」(注4)などを挙げることができる。

この長岡京址のSD1301からは、延暦6年、8年、9年の紀年をもつ木簡が多数出土しているが、この溝の下層付近からは、鎖といわれる別種のカギもみいだされている。この鎖といわれるカギと富波遺跡出土の鎖と呼ばれるカギとは、形状も機能も無論まったく異なるものであるが、そのことは、「延喜式」巻四神祇四、伊勢大神宮調度の項で、「鎖一具。…鎖打立二枚。…位金二枚。…匙一枚。…鑰一勾」(注5)なる記載のあることから明白である。

富波遺跡の場合、鎖の一部だけの発見であり、全長も12cmほどで比較的小さく、しかも全面腐蝕して材質の残存状態もあまりよいものではないが、恐らく構造や原理は、平城京左京八条三坊東市周辺地区SD1300より出土した鎖(注6)と(ばねをゆるめる際に、匙を入れる穴の位置こそ違え)ほとんど変わらないと思われる。石山寺の校倉建築に、鎖一具、鎖打立、位金などの具体的なセッティングの実例をみいだすことができるが、原理的な面を考える上で大いに参考に

る。(久米雅雄)

注1 鎖の訓みについては、現行の多くの漢和辞典は鎖は鎖と同字であるとし、鎌子、鎖鑰などをそれぞれさし、さやくと読んでいる。なかに、鎖は漢音でサ、呉音でソウ(SŪO)と解説したのものもあるが、本稿では国史大系中のふりがなにもとづきソウと読んだ。

注2 昭和48年度富波遺跡調査報告p.103、p.104における黒色土器と同型式である。(野洲式A類と名づく。)

注3 日本古典文学大系「万葉集」巻十六(3816番ならびにその注)

注4 長岡京址左京第13次発掘調査現地説明会資料(昭和52年6月12日向日市教育委員会)および高橋美久二氏、中尾秀正氏の教示による。

注5 黒板勝美編国史大系「延喜式」巻四神祇四p.84、p.85

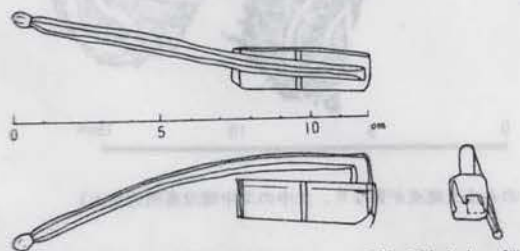
注6 平城京左京八条三坊発掘調査概報(昭和51年3月)



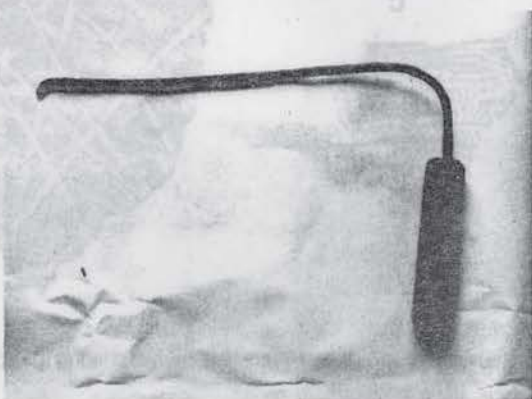
富波遺跡出土の鎖



石山寺校倉建築の鎖一具



富波遺跡出土の鎖



長岡京址出土の鎖